

論文

発話困難な重度身体障がい者における通訳者の「専門性」と「個別性」について

——天島大輔の事例を通して——

天 島 大 輔*・黒 田 宗 矢

1. はじめに

近年、人工呼吸器等の医療技術の飛躍的な進歩により、重度の脳障がいを負っても生存することが可能となった(中村 2006)。そのため、今後も重度の脳障がいを抱える患者が増えると考えられる。つまり、重大なコミュニケーション障がいを有し、新しい生と死の境界で身体も動かず、一生他者に意思を伝えることができず、自己の肉体に閉じ込められ続ける人々が増加することが懸念されている¹。筆者²は、その閉じ込められた人々の内の1人であった。

筆者は、14歳の時に医療過誤により心肺停止の状態が20分以上続いたため、低酸素脳症になり、脳の運動野が破壊された結果、四肢マヒ・視覚障がい・言語障がい・発話障がいに陥った。そのため、自発的に自己の意思を送信できないものの、周囲の意思を受信することのみは可能(立岩 2004: 379-386)であったために、その後半年間は、受信のみの一方的なコミュニケーションに陥ってしまった。しかし半年後に、母親が「あ、か、さ、た、な話法」³を生み出し、コミュニケーションが再び可能になり、孤独な世界を抜け出すことができた。

当時、両親や担当の看護師が筆者の言葉を読み取り、書き留めたノートがある。その1年間分のノートには、「いたい」「さむい／あつい」「のみたい」「せもたれたおして」「しっこ(トイレ)」といった、自己の痛みや生理的欲求などを伝える身体感覚に基づいたコミュニケーションが中心であった。とくに看護師とのコミュニケーションは、非常に簡単な「指示出し」に限られていた。

しかし、養護学校、大学受験、大学、大学院生活と時を経るにつれて、コミュニケーションの幅は広がっていった。生活のほとんどを大学生、大学院生の介助者と過ごすことになった。同時に、それまでの身体欲求に基づく単純な「指示出し」から、自己の思考に基づくコミュニケーションへと、その質を変化させいったのである。とくに大学での卒業論文執筆を機に、筆者は介助者の「通訳者」⁴としての役割を強く意識するようになった。

このように筆者のコミュニケーションの質の変遷とともに通訳者の役割が登場してきたが、依然としてコミュニケーションに付随する問題は解決されていない。本稿の問題認識として、筆者のような発話障がいを持つ者は、通訳者を介してもコミュニケーションの「即時性の欠如」にどのように向き合えばよいのか、簡単に解決されない点があげられる。

本稿では、筆者である天島大輔が利用している介助者の通訳者としての側面に注目し、通訳者としての「専門性」を明らかにする。また、論文執筆の場における通訳者との関係性の諸相を描くことで、自己自身で表現ができない発話困難な重度身体障がい者が研究活動をする際のリアリティを描こうと試みる。

1-1. 先行研究への批判的検討と本研究の意義

コミュニケーション障がいにおける先行研究によれば、「吃音という言語障害は、当事者と聴者による相互行為によって生じるが、吃音者は「相互行為に参入することから」排除される事態におちいつている(渡辺 2003)。こう

キーワード：通訳者、即時性の欠如、文脈情報の共有、協働作業、戦略的誘導

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2010年度入学 公共領域

した、理解に時間がかかるコミュニケーションに対する排除行為は社会に優生思想が流布されているためだろう。全国青い芝の会⁵総連合会初代会長であった、横塚晃一によれば、優生思想とは、「よく働ける者が、より強い者が、より速い者が、より美しい者が正しく偉いとするこの世の価値観」である（横塚 2007: 138）。

そして、健常者の優生思想によるコミュニケーション排除に対する障がい者の反発の一例として、兵庫青い芝の会会長を長年務めていた澤田隆司の先読みの禁止がある。澤田の介助者によれば、澤田は、介助者が先読みしようとした際、「一文字ずつ、「あ」行から「ん」までを根気強く、介助者に示めさせて、顔の表情や声や雰囲気や伝えながら、言葉を作っていきます」（澤田 2005: 14）と述べており、介助者による時間短縮のための先読みを断固として拒否した。つまり、速い者が正しいとする健常者の価値観を否定し、遅くともきちんと澤田自身の言葉を、読み取ることを求めた。このように、障がい者の意思決定を尊重し、介助者が障がい者の自己決定に干渉することは否定されてきた。究極 Q 太郎は旧来の介助者＝手足論を「介助者は障害者が『やってほしい』ことだけをやる。介助者は、その言葉に先走ってはならず、その言葉を亨けて物事を行うこと。障害者が主体なのであるから、介助者は勝手な判断を働かせてはならない」（究極 1998: 179）と述べている。これはすなわち、介助者には障がい者の手足の役になってもらう、ということである。

しかし、実際の障がい者と介助者の現場は、そう簡単に介助者＝手足論で語れるものではない。たとえば、前田拓也は『介助現場の社会学』において、重度身体障がい者と介助者は、「その関係〈において〉(in-relation) なにかを実現する」ものであることを指摘している。そして両者の個別の「関係性」のなかで介助は築かれていくがゆえに、そこには介助者の「主体性」が出ざるを得ないことを認めている（前田 2009: 83-84）。

さらに、府中療育センター闘争を率いた新田勲⁶の介助者でもある深田耕一郎は、介護の現場を注意深く考察し、介護者と被介護者のあいだに潜む「配慮」の二重規定に目を向け、次のように述べる。「配慮がなければその人を危険にさらす恐れがあるにもかかわらず、かといって、配慮をしすぎればその人の主体性を奪うことになる」（深田 2009: 86）ここには、「被介護者」、つまり障がい当事者の「主体性」の収奪に関する境界の見極めがたさが存在している。

先行事例において、澤田は介助者の先読みを一切否定しているが、筆者の場合、逆にコミュニケーションの「即時性の欠如」を補うために積極的に先読みを奨励しているという違いがある。ここでの澤田と筆者の、先読みに対する考え方の違いには、求めるコミュニケーションのフェーズの違いが関係している。澤田が先読みを否定し介助者の判断を介入させない姿勢には、彼が障がい者運動をアイデンティティの中心に置いてきたからである。一方の筆者は、大学院での研究が生活の中心であり、期限内に論文を提出するために先読みが必要になる。

このことを踏まえると、究極の唱えるような介助者＝手足論では、「即時性の欠如」を乗り越えることは困難であろう。一方、介助者の「主体性」を巡る前田や深田の議論が明らかにしたように、コミュニケーションのアウトプットに介助者の「主体性」がより深刻に介入してくる可能性がある。以上述べてきたように、これまでの先行研究で主張されてきたような介助者のあり方では、論文執筆において、通訳を必要とする筆者のような発話困難な重度身体障がい者のコミュニケーションを支援することが困難であり、このことが本研究の重要な課題である。

したがって、本研究の意義は、これまで着目されてこなかった問題である、通訳に頼らざるを得ない発話困難な重度身体障がい者にとっての通訳者との関係性を明確に理解することにある⁷。

よって本研究では第一に筆者である「天島大輔」と第三者が会話をしている様子から、「あ、か、さ、た、な話法」における読み取りの分析や、通訳者への半構造化インタビューを通して、天島大輔における通訳者に必要な「専門性」とは何かを明らかにする。さらに「あ、か、さ、た、な話法」の通訳現場への参与観察を通して、自己の思考に基づくコミュニケーションへと変化していった筆者が、現在の通訳者との論文執筆の在り方について考察する。

2. 方法

2-1. 「あ、か、さ、た、な話法」通訳の実態調査——対象と環境

本調査の対象者は「あ、か、さ、た、な話法」により意思疎通を図る「天島大輔（以下、天島）」とその通訳者4名である。通訳者は経験年数の異なる介助者を1名ずつ抽出した。また、通訳者の学歴も考慮にいった。通訳者の

名称は通訳者①（経験年数10年・造園系大学院卒・修士号取得）、通訳者②（経験年数5年・福祉系大学卒）、通訳者③（経験年数1年・大学3年生・政治学専攻）、通訳者④（経験年数1年未満・人文系大学院卒・修士号取得）とする。調査実施の際は、事前に資料を渡し、口頭でも研究の目的や方法を説明した。

また、調査は通訳者ごとに4回に分けて行った。調査場所は天島の自宅一室を使用した。調査は、記録・会話の相手役を担当する共同研究者（黒田宗矢）1名、調査対象である通訳者1名の計3名で行った。調査内容はビデオカメラで収録し、並行して録音も行い、全文文字起こしした。本調査は天島自身が参加しているため、共同研究者の黒田宗矢が行った。

2-2. 調査内容

調査内容は以下のa)、b)の2つに分けられる。

a) 天島と黒田（健常者）との会話における通訳の様子を記録した。会話は下記の内容の異なる会話A・Bの2種類を用意した。会話は同じ内容をそれぞれ2回行った。1回目は、先読み通訳し、2回目は、逐語通訳で読み取った。

会話 A

天島：プルサーマル計画は何だか知ってる？

黒田：知らないです。なんですか？

天島：原発の使用済燃料を再利用するんだよ。

黒田：なるほど～。計画は今どうなっているんですか？

天島：計画は見送られたらしいよ。

黒田：へえ～。大さん⁸に聞けばなんでもわかりますね！

会話 B

黒田：大さん、今日の晩ご飯は何にしますか？

天島：今日はホテルのレストランに行きたいな。

黒田：この近くにホテルってありましたっけ？

天島：吉祥寺の第一ホテルだよ。

黒田：あ～知っています。第一ホテルで何を食べるんですか？

天島：トッポギだよ。

黒田：大さんは韓国料理が好きですねえ。

b) a)の調査後、通訳者の基本情報や通訳時の工夫等について、約30分～1時間の半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は考察で適宜引用する。

2-3. 「あ、か、さ、た、な話法」通訳現場への参与観察

共同研究者の黒田は博士論文執筆に関わる通訳者2名と共に、論文執筆時の通訳現場に参入し、天島と通訳者間の専門的なコミュニケーションの様相をフィールドノートに記述した。通訳者2名は共に男性で、大学院で研究中の身である。通訳者Aは、介助・通訳歴が1年3ヶ月、現在は博士課程2年目である。通訳者Bは、介助・通訳歴が2年、現在は大学院の修士課程1年目である。

参与観察では、主に天島と通訳者A・B間における論文執筆時のコミュニケーションに着目し、時には観察者である黒田が会話に参入することもあった。ここで、黒田が採用した参与観察について言及しておく。本研究で採用した参与観察は、H・J・ガンズが類型化したものの一つ、「調査研究者が参与する」タイプの観察手法である（ガンズ1982 = 2006: 315）。本論文では天島と通訳者との会話や、通訳者自身の語りから得られた観察記録を用いて、天島と通訳者の関係性の在り方を示す事例を抽出し考察する。なお、黒田は対象者に対し調査者としての自己の立

場を表明し、参与観察の記録を学術的な媒体で公表することを伝え、その了承を得ている。

3. 「あ、か、さ、た、な話法」通訳の実態調査結果

3-1. 通訳に要する時間測定

調査 a) の会話 A・B において、各通訳者が天島と第三者の間に立って通訳をする際の会話に要する時間を測定した。なお、会話 A・B を健常者同士が行った場合に要する時間はともに 20 秒である。

3-2. 通訳における先読みの実態

会話 A・B の通訳において、通訳者が「あ、か、さ、た、な話法」を用いながらどのように天島の言葉を読み取りしているかを分析した。会話 A・B のスクリプトからそれぞれ一文を抽出し、各通訳者がその一文をどのように天島から読み取ったかをまとめた。

会話 A においては天島の「プルサーマル計画は何だか知ってる？」という最初の問いかけを取り上げた。「ふるさあまるけいかくはなんだかしつてる？」の 20 文字のうち、通訳者が読み取った文字（読み取りの行）や先読みした部分（先読みの行）を明確にし、第三者にその問いかけを通訳するまでの時間も記録した。

また会話 B においては「吉祥寺の第一ホテルだよ。」という天島の応答を取り上げた。なお、健常者が「プルサーマル計画は何だか知ってる？」と伝えるのも、「吉祥寺の第一ホテルだよ。」と伝えるのも、両方とも約 2 秒かかる。

4. 会話調査とインタビュー調査の考察——「文脈情報の共有」⁹の意義

筆者は聴覚に障がいはないため、相手のメッセージを理解するインプットには問題はない。したがって、通訳プロセスは自己のメッセージをアウトプットする際に生じる。このプロセスにおいて、一文字一文字読み取っていく「あ、か、さ、た、な話法」では地道な作業が必要なため、筆者はなるべく短く、簡潔に、わかりやすく自己の意思を通訳者に伝えようとする。この作業を経て、通訳者は筆者の簡潔な言葉に詳しい説明を加え、時には敬語に直す等の変換作業を行いながら相手に伝える。本調査では、コミュニケーションの鍵を握る読み取りの過程に着目し、通訳者に求められる能力やそこに潜む課題について考察する。

4-1. 筆者のサインを正確に読み取る

通訳者が筆者の言葉を読み取る段階において、①筆者のサインを正確に読み取る、②読み取った文字を適切な語句あるいは文節に区切っていく、③筆者の意図を予測する先読み、以上の大きく 3 つの能力が求められる。

まず、読み取りの正確性には、筆者のサインと通訳者が発話する五十音のテンポがうまく合わなければならない。通訳者は筆者の首や腕を取ってサインを読み取るが、筆者は不随意運動が顕著なため、通訳者は随意運動か否かを見極めながらサインを読み取る。また、通訳者が「あ、か、さ、た、な…」と 1 文字ずつ声に出すスピードや、双方のコンディションによって意思疎通のスムーズさが左右される。

さらに、通訳者の「五十音の読み取り方」のパターンは複数あり、それが読み取りの正確性にも影響を与えている。特に読み取りの序盤で「前半？（ア行～ナ行）後半？（ハ行～ワ行）」と聞くパターンと、毎回ア行から聞くパターンが存在する。「前半？後半？」と聞く方が毎回ア行から読み取るのに比べて、より早く語を特定できると考えられる。当初は、筆者の母を初めとして毎回ア行から読み取る方法だったが、ある通訳者が初めに前半と後半を聞くようになった。現在では通訳者によって五十音の読み取り方は異なる状況である。通訳者①と通訳者③は前半か後半かを聞くパターンである。しかし、毎回前半か後半かを聞いているわけではない。また両者とも「前半？」と聞き、イエスの場合はア行から、ノーの場合はハ行から読み取る。つまり基本的に筆者に確認するのは「前半？」のみであり、「後半？」は聞かない。そのことによって、より時間を短縮しようとする工夫がみられる。

一方で通訳者②と通訳者④は前半か後半かは聞かず、毎回ア行から読み取りを始める。通訳者②の場合は、前半か後半か聞く方が筆者にとっても負担が少ないと考えているが、そうすると「頭が混乱」と述べている。通訳

者④は「前半、後半というのは余裕がないので言えていないだけで、敢えて言っていない訳ではない」と述べている。

通訳者②の場合は通訳経験が長い分、当初自分が覚えた方法に慣れてしまい、新しい読み取り方に対応できない。しかし、通訳者②は、「言葉が見えてきたら、先に『はまやらわ』を出しちゃったり」と述べているように、個人的に読み取りに柔軟性を持たせることで、硬直的な読み取り方法を避けてもいる。逆に通訳者④の場合は、通訳経験の浅さから工夫をする余裕がないと述べている。また、通訳者④は読み取り中にメモを取っており、一語一語紙に残している。

このように、通訳者は読み取りの正確性を上げるため、読み取り作業の中で様々な工夫を凝らし、通訳における「即時性」の獲得を目指していたことが理解できるだろう。

4-2. 適切な語句あるいは文節に区切る

次に通訳者は読み取った文字を単語化・文章化していかなければならない。筆者は一文字一文字を紡ぎながらアウトプットしていくため、単語への変換や文節の区切り目などの細かい指示は出しにくく、通訳者の裁量に依るところが大きい。つまり、「わたしはしようかいしゃのこみゆにけえしよんについてけんきゆうしています」と読み取った文字列を、「私は障がい者のコミュニケーションについて研究しています」というように、濁点や促音への変換、適切な語句への構成、助詞との区別などを通訳者が自ら行わなければならない。

しかしそのような過程で、単語と助詞が混ざってしまい誤訳することも多く、通訳者にはそれ相応の「慣れ」や「ボキャブラリー」が必要となる。たとえば、筆者が「母は・・・」と伝えようとした際に、通訳者は「ハハハ！」と笑っているという意味で通訳してしまうことがある。また、「メリトクラシー」と伝えようとした際も、その単語自体が解らない場合もある。本調査においても通訳者④は、会話Aにおいて「プルサーマル計画」の意味を理解するために非常に時間がかかった(6分7秒)が、おそらく「ふるさあまる」が単なる文字の羅列となってしまう意味を見出せなかったのだろう。こうした通訳者の変換作業は、通訳者が持つボキャブラリーだけでなく、筆者との「文脈情報の共有」を構築していくことで精度を上げられると考える。

このように「あ、か、さ、た、な話法」における通訳者は読み取りだけでなく、筆者の言葉を適切に変換する必要がある、この変換作業を通訳者が適切におこなえることがきわめて重要な課題となる。そして、単なる変換だけでなく、予測をする変換である先読みは、筆者のスムーズなコミュニケーションにきわめて重要な影響を及ぼす。

4-3. 筆者の意図を予測変換する先読み

最後に通訳者に求められる最大の能力が先述の先読みである。先読みとは「あ、か、さ、た、な話法」において、通訳者が筆者の言葉を読み取りながら、その先を予測変換していくスキルである。筆者は、この通訳者による先読みを支えられている部分が多く、通訳者が先読みをすることでタイムラグは圧縮されると考える。

調査a)では、それぞれの会話において2回通訳をしてもらった。1回目はいわゆる先読みをする通訳で、筆者の意思を汲み取りながら言葉を積極的に予測していった。2回目は、会話の内容を知った上で、先読みはせず一語一語読み取ってもらった。つまり、濁点の有無や終わりまで通訳者は一切予測せずに、一字一句丁寧に読み取るというスタイルである。

1回目と2回目では会話A・Bともにその時間に大きな差がある。逐語通訳する2回目は先読み通訳の1回目比べて約2倍の時間がかかる。これは先読み通訳のタイムラグの少なさを端的に示しているが、通訳者へのインタビューにおいて4名とも先読み通訳の方が早く且つやりやすいと答えている。逐語通訳は筆者の意思を正確に伝えられるが、時間がかかる上に通訳者自身への負担も大きくなる。

その一方で、ある話題に対して筆者と通訳者に「文脈情報の共有」がない場合は、先読みするよりも一語一語読み取った方がむしろ早い場合もある。特に通訳者④は、会話Aの場合は先読み(10分32秒)も逐語通訳(11分30秒)もそこまで差が無く、先読みがうまく機能しなかった一例である。

しかし、通訳者①は会話Aの「プルサーマル計画は何だか知ってる？」において、先読みの成功が2回、失敗が3回と他の通訳者に比べて先読みの正確性に欠けるが、時間は最も早い(1分10秒)。さらに会話Bの「吉祥寺の第一ホテルだよ」では、通訳者②が6文字の読み取りで38秒だが、同じく6文字読み取った通訳者④の時間は1分37

秒である。通訳者④は読み取った文字数こそ通訳者①に並ぶが、時間を見ると通訳者の中で最も遅い。つまり、必ずしも先読みをすればより円滑なコミュニケーションが取れるわけではなく、先述の「読み取りの正確性」や「単語の区切り目」等々他の要因も影響すると考えられる。

また、会話 A の「プルサーマル計画は何だか知ってる？」が会話の始まりであったのに対して、会話 B の「吉祥寺の第一ホテルだよ」は前の文脈から筆者の返答を予測しやすい。そのため先読みのパターンは通訳者によってそこまで異なることはなかった。このように前後の文脈によって通訳者の対応は随分と容易になる。通訳者②が「吉祥寺の第一ホテルも一緒に行ったことがあるので。想像はついちゃう。」と述べているように、事前の情報が多いほど、またはトピックが絞られているほど、先読みの可能性は広がるということである。

したがって、通訳者に求められる先読みは、筆者との「文脈情報の共有」がなければ上手く機能しないことが明らかとなった。単に通訳者が豊富な語彙力や高度な文章力を持っているだけでは足りず、それらを当事者である筆者と共有していかなければ意味をなさない。この「文脈情報の共有」が通訳者における先読みの正確性、さらには筆者にとっての通訳の質に深く関わる可能性が示唆された。そのため通訳者単体の能力というよりは、当事者である筆者と通訳者の関係性に着目しながら、筆者におけるより良い通訳について考えていく必要がある。

4-4. 天島大輔と通訳者間の「文脈情報の共有」

筆者と通訳者の「文脈情報の共有」であるが、本調査の分析を通してより詳しく論じたい。

通訳者①・②・④は、いずれも会話 A よりも会話 B に要する時間が短い。会話 A はプルサーマル計画という原発のニュースに関する会話で、会話 B は今日の夕飯は何にするかという日常的な会話である。会話 A ではプルサーマル計画という原発のニュースをチェックしていない限り耳慣れない単語が登場するため、日常的な単語が主な会話 B の方がより早く通訳できると推測される。実際に通訳者へのインタビューにおいて、3名の通訳者は会話 B に比べて、会話 A における通訳の方が難しかったと答えている。その理由として、プルサーマル計画に関する事前の知識が少なかったことを挙げていた。実際に通訳者①は会話 A では「自分のあいまいな知識がちらちらでてきて」やりにくかったと答えている。一方で、通訳者②の場合は「濁点とか聞いていけば通訳できる」と冷静であった。しかし、プルサーマル計画に関する知識はあまり無かったため、もし会話相手の黒田がプルサーマル計画に関する意見を筆者に求めた場合は「すぐには読み取れない」と答えている。通訳者④は特に会話 A の通訳に苦戦していた。通訳者④は「プルサーマル計画っていう単語が、直ぐに頭の中になく」と答え、筆者から読み取った「ふるさあまる」が「プルサーマル」に結びつくまでに相当の時間がかかった。通訳者④が「お互いが認識しているバックグラウンドに原発事故の事が入っていなかった」と答えているように、プルサーマル計画に関する事前の知識が少なかっただけでなく、日常の中で筆者とその話題を共有する機会が無かったことも要因だろう。

一方で通訳者③は、日常的な会話 B (4分42秒) よりも原発に関する会話 A (4分4秒) の方が通訳に要する時間が短かった。通訳者③の場合は、会話 A の「社会的背景」を知っていたため、プルサーマル計画という単語や計画の延期などについてよりスムーズに先読みできたと考えられる。つまり、政治学の知識があることで、筆者の言わんとしていることに対していくつもの候補が出てくるのである。しかし、通訳者自身の引き出しが多すぎると、その中から絞り込むのが難しい時もある。通訳者③も「大輔さんの言っていることと、僕自身が引き出しで持っている、知識として持っていることが一致した時は、先読みを素早くできる」と述べる一方で、通訳者の知識が前面に押し出されすぎて「先読みを間違える方向」に向かってしまう。結果的に、逐語通訳よりも時間がかかる危険性がある。つまり、通訳者が持つ引き出しから筆者が伝えたい言葉を的確に選び取ることが重要となる。会話 A とは逆に、会話 B は通訳者③自身が筆者の日常生活に関わる期間が短く、「吉祥寺の第一ホテル」のことを知らない等、筆者との「文脈情報の共有」が足りなかったため時間がかかった (1分24秒) と考えられる。

通訳者③の結果は、通訳者①・②・④の結果とまったく異なるが、タイムラグを決定する要因は共通している。総じて筆者の伝えたい事柄と通訳者のボキャブラリーが一致しているかどうか、さらにそこからの的確な言葉を選び取れるかどうか重要である。そして、そのボキャブラリーというのは、通訳者が筆者との関わり以外において得た知識も重要だが、筆者と共有する知識や筆者に関する情報を通訳者がよく把握することがきわめて重要である。

4-5. 「文脈情報の共有」×「時間」＝「専門性」＋「個別性」

以上のように、筆者のコミュニケーションのタイムラグを決定する要因として、通訳者自身が、筆者と共有する知識や筆者自身に関する情報を広範に把握することの重要性を述べてきた。そのうえで、筆者との「文脈情報の共有」が増えれば、それだけ通訳者の「専門性」も上がることを指摘したい。ここで述べた通訳者の「専門性」とは、通訳者が筆者と共有した時間の中で積み重ねてきた「文脈情報の共有」の総和である。つまり、「文脈情報の共有」×「時間」＝「専門性」である。筆者が「今までの経験では、信頼関係を築くには一にも二にも年月が必要だ」（天島 2012: 94）と述べるように、通訳者と共有した「時間」の分だけ「文脈情報の共有」は増えていくと考えられる。

しかし、ここで述べた「専門性」だけでは、筆者の論文執筆の現場において通訳が成り立たないことも指摘せざるを得ない。「専門性」が高い通訳の1つとしては、コミュニティー通訳¹⁰が例に挙げられるだろう。医療や裁判の場面において外国語通訳を行う「コミュニティー通訳者」には、特定の場面に応じた専門用語や、様々な場面で臨機応変に対応できる豊富な知識が必要不可欠である（水野 2008: 26-27）。それは筆者の通訳者においても同様のことが言える。こうした知識を備えたうえで、筆者との「文脈情報の共有」を積み重ねれば、通訳者の専門性は向上すると考えられる。

また、通訳者③はインタビューで「僕自身も大学院を考えていて研究者に興味もあるので、大輔さんが研究者になろうとする過程を知りたい」と述べており、筆者の研究活動に対して非常に興味を持っていた。さらに、通訳者①は「障害学は無知だったけど、面白いなって思ってるし。自分でも知らなかった知識をいっぱい勉強できるし、それが大輔のためになって派生していく」と述べる。これらの発言から、研究という「個別性」の高い領域を共に歩んでくれる、通訳者の必要性和その重要性に気づかされた。ここでいう「個別性」とは、研究を遂行するうえで必要となる情報収集、調査、思考、記録、アウトプット作成、発表、ディスカッション等のアカデミックスキルを指す。「個別性」という、筆者特有の属性を理解し、それに協力してくれる通訳者の存在は、コミュニケーションにおける「即時性の欠如」の乗り越えにも有用な存在である。ここでいう「専門性」と「個別性」の違いは、筆者と通訳者の関係性の中で生じるか否かにある。「専門性」は、「文脈情報の共有」を通して筆者と通訳者の関係性の中でカスタムメイドされるものであり、筆者の通訳や生活支援をする上で必要不可欠な要素である。その一方で、「個別性」は、筆者と積み重ねた「専門性」に加えて、筆者の研究者という「個別性」に対応し、筆者の関係性とは切り離された通訳者固有の能力を指す。

ではその通訳者とは日常会話をこなしていた通訳者といかなる相違がみられるのか。どのような関わり方を通して、通訳作業を行っているのか。以下、論文執筆現場における通訳者との関係性を、参与観察による調査から読み解き、そのリアリティを考察していく。

5. 論文執筆のリアリティ

本項では、もう一つ議論の俎上に載せなければならない問題がある。それは、筆者が論文を執筆する際の、通訳者のあり方である。自己の思考を伝えるコミュニケーションへと変化していった筆者の通訳者との「論文執筆のあり方」について「協働作業」と「誘導」という2つのキーワードを基に考察を加えていきたい。

5-1. 天島大輔と通訳者の「協働作業」

筆者は大学での卒業論文執筆以来、コミュニケーションの内容が複雑化してきた。その中で通訳者は、とくに論文執筆の場面において、筆者の知識や思考の形跡や道筋を追いかけたり、あるいはさかのぼり、その意図を探求する思考実践、つまりは「トレース」作業を行う。そのような、思考実践を通じて、「文脈情報の共有」を積み重ね、その上で「協働作業」によって筆者のアウトプットをサポートするに至っている。

ここでいう「協働作業」とは、坂本句の定義をみると「対等なパートナーとして出会い、互いの違いや葛藤を乗り越え、互いの立場や価値観を尊重し、互いのスキルや資源を活用し、共有された一つの学習目標や課題の達成をめざすプロジェクト」（坂本 2008: 54）としている。また、藤村正之は「関係を重視しつつ集合的な問題対応を図る」ことを「協働性」と定義付けている（藤村ほか 2013: 7）。筆者自身の論文執筆にみられる「協働作業」は坂本の定義

に近いのであるが、ここで留意しておく点は、「対等」に関してであり、「対等」な関係性が、介助者と被介助者に見出されるかという点には注意が必要だ。その点に関しても、論文執筆における通訳者との関係性に新たな視点を見いだせる可能性はある。

筆者の場合、「協働作業」への取り組みは、特に大学院における論文執筆で顕著となった。基本的には、筆者が述べたい言葉を通訳者が読み取り、文字を打ち込んで貰っているのだが、打ち込むには、通訳者が専門用語や参考文献の内容、それに対する筆者の主張を理解している必要がある。しかし、それらを理解した上で、通訳者は筆者と異なった意見を持つことがある。そのような関係性においては、筆者が満足いく形の論文にするために、通訳者の意見、主張を積極的に聞き、お互いの意見を吟味する「協働作業」が適切であると考えられる。

5-2. 論文執筆のリアリティ——参与観察の現場から

通訳者と「対等なパートナー関係」を築きながら「協働作業」で論文執筆作業を行う必要性を提示した。次に論文執筆現場における通訳者の「誘導」の問題を、参与観察のデータを基に考察を加えていきたい。

筆者の論文執筆においては、通訳者の「誘導」は不可避と言わざるを得ない。ここでいう「誘導」とは、「障がい者の自己決定よりも、介助者が障がい者本人にとって利益になると判断した選択肢や結論を、本人が決定するよう働きかける有り様である」と定義づける。

社会福祉学や介助支援論における議論では、「誘導」を避けられない、やっかいな概念として認識している。石川時子は、「誘導」を「他者の選好形成に働きかけて意思決定を変化させること」と暫定的に定義し（石川 2012: 47）、「本人の選好形成に対して誘導が起きることは避けられない」と指摘する（石川 2012: 54）。さらに寺本晃久は、「誘導がやっかいなのは、支援者との情報格差や関係性が自己決定にどの程度影響しているのかが不明確な点」を指摘し、「誘導」の危険性をも喚起している（寺本 2000: 33）。

一方筆者は「誘導」を肯定的に活用している。なぜなら論文執筆において、締め切りがあり時間を短縮しなければならず、さらに自己自身で表現できないため、通訳者による、ある程度の「誘導」を必要とするからである。

そのため、通訳者による「誘導」を否定するのではなく、それをある程度受容しながら自己決定権を保ち続けるあり方を模索する必要があるのではないだろうか。筆者の通訳介助は、研究会における参加者からの指摘とは違い、一緒に論文を作成する共同研究者という方が近い。その意味で筆者のように意思のアウトプットに障がいを持つ者にとっては、通訳者の「誘導」が入り込むことは不可避であるが、最終的にアウトプットするかどうかの自己決定は筆者にある。例として、参与観察のフィールド・ノーツより、筆者と通訳者 A の執筆介助のプロセスを引用したい。状況としては、通訳者 A が筆者の与えたキーワードを文章化し、その文章を音読して筆者に確認する場面である。

通訳者 A：障がい者は“モノ”として扱われてきた。

筆者：“モノ”は強すぎる。“弱者”だ。

通訳者 A：“モノ”言わぬ弱者。

筆者：“モノ”言わぬは外して。

通訳者 A：はい。

(フィールド・ノーツ p2, 2013年6月26日)

つまり、いかにアウトプットの過程において他者の「主体性」が介入しようと、それを自己の意思としてアウトプットするかどうか決定するのは筆者の自己決定といえる。寺本は自己決定に関する議論の中で、「全ての援助が、援助される当事者の必要にしたがってなされ、情報は提供しても、決定するのは当事者である」と述べているように（寺本 2000: 29）、通訳者の意見を採用するかどうかは筆者の自己決定に委ねられている。

そして、筆者は戦略的に「誘導」することで、自己の意思をより速く伝えようとしている。ここで筆者と通訳者 B（この通訳者は、大学院を志望していた通訳者③のことである）の執筆介助のプロセスを参照したい。状況としては、筆者が論文中において用いる「介助者」の定義を執筆する場面である。なお、筆者はこの会話の前に、あらか

はじめ究極 Q 太郎の介助者 = 手足論に関する文献 (究極 1998) を通訳者 B に示し、読んでもらっている。

筆 者：通訳者 B にとって「介助者」とは何か？

通訳者 B：介助者とは、障がい当事者の指示に従って行動する人のことですよね。

筆 者：よく言われる、介助者 = 手足論だよ。

通訳者 B：そうですね。身体介助では、してもらいたいことがはっきりしていて、手足になりきれますよね。

それにその人の思考や思想を知っていなくても介助できますよね。

筆 者：うん。でもわしはそれ以上を求めるよねえ。

通訳者 B：確かに。一緒に論文を書くには、大さんの考えをトレースする必要がありますからね。

(フィールド・ノート p3, 2013 年 7 月 10 日)

つまり、筆者は通訳者の考えを自分が意図するように方向付け、その方向付けられた通訳者の意見に同意することで、自分の考えを通訳者に瞬時に伝えている。筆者は通訳者の意見に同意することで一見「誘導」されているように思えるが、実は通訳者に自分の考えを代弁させるように「戦略的誘導」をしているということになる。これによって、論文執筆における「即時性」を担保しているのである。

また、通訳者 A は筆者と通訳者の関係性について以下のように述べている。

通訳者 A：(当事者と通訳者の) 関係性とは？(通訳者は) 上から目線がいいのか？ティーチングじゃなくて、コーチングだと思う。(通訳者は) 呼び水だよ。自分は、大輔さんの言いたそうなことを言っている。

(フィールド・ノート p4, 2013 年 7 月 24 日)

通訳者 A の語りから、「コーチング」や「呼び水」という関係性のイメージが得られた。つまり、通訳者は筆者の指導教授ではなく、筆者の考えに共感しながら、その考えを文章化していく手助けをする存在と考えられる。

最後に、筆者の求める通訳者の「二面性」について、通訳者 A・B が「通訳者の在り方」について議論を交わした際の会話を参照したい。通訳者はどのように筆者と関係を取り結びながら論文執筆作業に取り組んでいるのだろうか。また、筆者のニーズを根拠にした、通訳者の役割にはどのような側面が見出されるのか。

黒 田：僕は(筆者が何か言うまで) 待つタイプ。

通訳者 B：C さん(経験年数 10 年の通訳者①) もそうだよ。

通訳者 A：どちらがいいのか？

筆 者：刺激も欲しいんだよ。

通訳者 A：どちらも必要なんだね。

黒 田：初めは(筆者の発言を) 待って、それを受けて文章化する。それから個人の意見も述べる。どうしても先回りして考えてしまうから、気を付けな。

通訳者 B：でも、それが楽だと思う面もありますよね？

筆 者：(激しく同意)。引っ張る人と後方でフォローする人が必要。

(フィールド・ノート p5, 2013 年 7 月 24 日)

筆者の言う「刺激」とは、通訳者からの積極的な提案や介入を指す。たとえば、先程の通訳者 A が提案した「障がい者は“モノ”として扱われてきた」という文章はその良い例である。このような提案があるからこそ、筆者に考え、表現するための「刺激」を与えてくれるのである。さらにそれは、「即時性の欠如」を乗り越えることにも寄与するのである。

一方で、筆者の考えを読み取って、理解してから文章を作る、「待つタイプ」の通訳者の存在も必要不可欠である。このような通訳者の存在が、筆者の自己決定権を担保しているのである。

以上のように、筆者は通訳者が自身の意見を述べる積極性と自己の言葉を待ってくれる忍耐力、つまり、「引っ張る力」と「支える力」の両方を求めていることがわかる。そのためにはタイプの異なる複数の通訳者と上手くバランスを取りながら「協働作業」を図っていく必要がある。

6. 結論

筆者の通訳者による通訳は、一字一句読み取るという従属的な行為というよりは、非常に独自性が高い行為である。

本研究では第一に筆者である「天島大輔」と第三者が日常的な会話をする際の様子から、「あ、か、さ、た、な話法」における読み取り方法の分析や、通訳者への半構造化インタビューを通して、通訳者に必要な「専門性」とは何かについて考察を深めてきた。ここでは、先読みとそれを可能とする「文脈情報の共有」の重要性が明らかとなった。さらに筆者の通訳者における「専門性」は、通訳者が筆者と共有した時間の中で積み重ねてきた「文脈情報の共有」の総和であることが導き出された。

また、論文執筆という「個性」を持った通訳の現場から、参与観察を通して通訳者との関係性とそのリアリティを描きだした。論文執筆現場において筆者は、「文脈情報の共有」を持った通訳者との「協働作業」によって論文を執筆していること、また通訳者による「誘導」や介入を否定するのではなく、それをある程度受容しながら、障がい者の側が自己決定権を保ち続けるあり方を模索する必要性を考察した。さらに、通訳者の語りから、「コーチング」や「呼び水」という関係性のイメージが得られた。一方で、筆者自身が意図的に行う「戦略的誘導」により、論文執筆における「即時性」を担保しようと試みていた。最後に、筆者と通訳者の関係性の議論から、積極的に提案や介入をし、「刺激」を与える通訳者と、筆者の言葉を「待ち」、寄り添いつつ執筆を進める通訳者の存在の重要性が明確になった。本稿で提示された、折り重なり合う関係性のあり方こそ、筆者の「あ、か、さ、た、な話法」のリアリティであり、「即時性の欠如」を乗り越えるための実践なのである。

最後に本稿では通訳者との「依存の関係性」や、「代替不可能な関係性」まで見出すことはできなかった。本研究も含め、発話困難な重度身体障がい者にとって参照枠となるような研究の発展が望まれる。

謝辞

本論文を作成するにあたり、執筆の介助にあたってくれた介助者の井上恵梨子さん、嶋田拓郎さん、向井亮さん、浅羽民江さん、村田桂一さん、木宮誠則さんに感謝の意を表したい。

【註】

- 1 これら当事者の著作や研究書は数多あるが、代表的なものは以下を参照。『おしゃべり目玉の貫太郎』（鈴木 2007）、『沈黙を超えて生きる——夫と妻・・・それぞれの愛と闘いの物語』（フィリップ・ヴィガンら 1998）、『マドンナの首飾り——橋本みさお、ALS という生き方』（山崎 2006）。
- 2 以降、「筆者」は天島大輔であることを断っておく。
- 3 筆者が使用するのは、意思伝達装置を用いない「あ、か、さ、た、な話法」である。まず通訳者が五十音図の横軸を尋ね、筆者は伝えたい語の行でサインを送り、次に縦軸の語を同様にして1文字確定する流れである（天島 2012）。
- 4 本稿で使用されている通訳とは、障がい者の個々の特性に合わせた「コミュニケーション支援」を指しており、広義の意味での通訳全般を指しているものではない。筆者の支援をする通訳者では、通訳者が筆者の意思を読み取り第三者に伝えるという役割の他に、論文やメール等を書く際に通訳者が筆者の意思を読み取り文章化する役割も含まれる。
- 5 日本脳性麻痺者協会青い芝の会は、1957年に結成された脳性マヒ者の当事者団体である。障がい者は治った方が良いものとされた健常者文明の価値観を否定し、バスや施設の占拠などの直接行動なども辞さない形で、障がい者の権利獲得の運動を行った（渡邊 2011: 155）。この運動の詳細は以下を参照（角岡 2010）。

- 6 新田勲は脳性マヒによる言語障がいと四肢マヒのため、足で文字を書き、それを一文字一文字介助者が読み取りコミュニケーションをしている。1970年代からの介護保障運動の歴史を総括した『足文字は叫ぶ！——全身性障害者のいのちの保障を』（新田 2009）には、施設を出て在宅生活を始めた新田の思想と活動の記録が描かれている。
- 7 「わずかに動く指 夢実現」（熊本日日新聞 2013年3月3日）に、九州ルーテル学院大学に合格した柴田美優さんの記事が掲載された。筆者は、2013年8月19日に同大学で講演を行った際、会場に来てくれた柴田さんの姿に、本研究の意義を置くことを考えた。
- 8 会話調査、インタビュー調査、参与観察に出てくる「大さん」、「大輔」、「大輔さん」は天島の呼称である。
- 9 ここでの「文脈情報」とは天島個人に関する（介助や生活一般に関わる）情報として限定的に用いる。身体・生活情報の場合もあれば、政治的課題の場合もあれば、論文執筆に関わる専門的な場合もある。
- 10 近年の国際化の流れの中、外国で生活する人々の急増に伴い、司法、医療、教育、その他生活に関わる様々な場面で「言葉の壁」が障害となっている。このような場面で言葉の「橋渡し」をする行為を「コミュニティー通訳」と呼ぶ。「コミュニティー通訳者」は、一般の人々の生活に密着ししつつ、当事者に関する文化的背景等、あらゆる情報を事前に研究し通訳に望む（水野 2008: 11-15）。

[参考文献]

- フィリップ・ヴィガン／ステファヌ・ヴィガン，中山真彦訳，1998，『沈黙を超えて生きる一夫と妻・・・それぞれの愛と闘いの物語』主婦と生活社．
- 深田耕一郎，2009，「介護というコミュニケーション——関係の非対称性をめぐって」『福祉社会学研究』6.82-102.
- 藤村正之編，2013，「個人化・連帯・福祉」『協働性の福祉社会学 個人化社会の連帯』東京大学出版会．
- ハーバート・J・ガンズ，松本康訳，2006，『都市の村人たち イタリア系アメリカ人の階級文化と都市再開発』ハーベスト社．
- 石川時子，2012，「社会福祉における「誘導」とリバタリアン・パターナリズム論の近似性」『社会福祉』53.45-56.
- 角岡伸彦，2010，『カニは横に歩く 自立障害者たちの半世紀』講談社．
- 究極 Q 太郎，1996，「介助者とは何か？」『現代思想』26-2.176-183.
- 前田拓也，2009，『介助現場の社会学——身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ』生活書院．
- 水野真木子，2008，『コミュニティー通訳入門——多言語社会を迎えて言葉の壁にどう向き合うか・・・暮らしの中の通訳』大阪教育図書．
- 中村尚樹，2006，『脳障害を生きる人びと——脳治療の最前線』草思社．
- 新田勲，2009，『足文字は叫ぶ！ 全身性重度障害者のいのちの保障を』現代書館．
- 坂本旬，2008，「「協働学習」とは何か」『生涯学習とキャリアデザイン』5: 49 - 57. (2013年10月2日取得，http://repo.lib.hosei.ac.jp/bitstream/10114/6703/1/cd-gak05_sakamoto.pdf).
- 澤田隆司，2005，『澤田隆司自立生活 30 周年記念文集』.
- 鈴木公子，2007，『おしゃべり目玉の貫太郎』講談社．
- 立岩真也，2004，『不動の身体と息する機械』医学書院．
- 天島大輔，2012，『声に出せないあ・か・さ・た・な—世界にたった一つのコミュニケーション』生活書院．
- ，2013，「天島大輔におけるコミュニケーションの拡大と通訳者の変遷——「通訳者」と「介助者」の分離二元システムに向けて——」『Core Ethics』vol.9.163-174.
- 寺本晃久，2000，「自己決定と支援の境界」『Sociology Today』10 :28-41.
- 渡辺克典，2003，「相互行為儀礼と言語障害——〈気詰まり〉を生きる吃音者」『現代社会理論研究』13: 177-189.
- 渡邊琢，2011，『介助者たちは、どう生きていくのか——障害者の地域自立生活と介助という営み』生活書院．
- 山崎摩耶，2006，『マドンナの首飾り——橋本みさお、ALS という生き方』中央法規出版．
- 横塚晃一，2007，『母よ！殺すな』生活書院．

Expertise and Individual Styles of Interpreters for People with Serious Physical and Speech Impairments: The Case of Daisuke Tenbata

TENBATA Daisuke, KURODA Shuya

Abstract:

This paper is mainly concerned with the problem of how to overcome the lack of immediacy in communication with people having serious physical and speech impairments. To illustrate the expertise of the interpreters of the author, Daisuke Tenbata, who has serious physical and speech impairments, and the styles of relationship between the author and his interpreters, the author surveyed conversations, conducted interviews and acted as a participant observer at translation scenes. Through the research, it became apparent that, to compensate for the lack of communication immediacy, the author worked together with his interpreters, who accumulated expertise through a shared context and time with the author. In addition, by strategic guidance, he let his interpreters speak on behalf of himself. Moreover, it also became apparent that there are two kinds of interpreters: those who make active suggestions and provide stimulus, and those who wait for the author's words and stick close to them. In this paper, the author describes an example of the presence of interpreters who intervene actively in the author's decision-making. The significance of the paper is that it suggests the possibility of new ways of communication between interpreters and people with speech impairments.

Keywords: interpreter, lack of immediacy, shared context, collaborative activity, strategic guidance

発話困難な重度身体障がい者における通訳者の「専門性」と「個別性」について

——天島大輔の事例を通して——

天 島 大 輔 ・ 黒 田 宗 矢

要旨:

本論文の問題意識は、発話困難な重度身体障がい者が抱えるコミュニケーション上の「即時性の欠如」をいかに乗り越えるかにある。よって本論文では発話困難な重度身体障がい者である天島大輔の通訳者の「専門性」とその関係性を明らかにするため、通訳現場の会話調査及びインタビュー調査、参与観察を行った。調査の結果、コミュニケーションの「即時性の欠如」を補うために、通訳者は「文脈情報の共有」と「時間」から構成される「専門性」を積み重ね、論文執筆において「協働作業」という場を形成していた。さらに、通訳者を介して自身の意図を代弁させる「戦略的誘導」を行っていた。また、通訳者には、積極的に提案し「刺激」を与える存在と、筆者の言葉を待ち、寄り添う存在を明らかにした。本論文は筆者の意思決定に積極的に介入していく通訳者の存在を可視化し、発話障がいを持つ人々の新たなコミュニケーションの在り方を示唆する点で極めて意義がある。